

対的に粘土粒径の物質の比率が高い六甲山地の試験斜面では、小尾根部の表層土には降雨によって歪みが発生するが多くは解消するため、一年を通じて土壌に残留する変位は小さい。対して、肩部の土壌ブロックは、相対的に夏季には土層下部が前に押される動き、冬季には土層上部が斜面下方にお辞儀をする動きにより、斜面下方に1年に1 cm以上変位していることが検出・推定された。

キーワード：ソイルクリープ、風化花崗岩、森林斜面、ストレインプルーブ、すべり、表層土

8. 火山麓草地における地形と表層土壌特性の関係

山本 博（畜産草地研究所）

Hiroshi YAMAMOTO: Landform and soil properties in a pasture at volcanic foot

山地傾斜地を家畜生産のための草地として活用し、また急激な地形変化に対処するためには、その立地条件を把握し、水土保持に配慮した管理が必要であるとの観点から、浅間山麓の放牧草地を対象に地形と土壌特性との関係を検討した。谷頭部の一部に位置する放牧草地1.6 haについて、10 m メッシュ地点の地形測量と表層10 cmの土壌物理性の測定を行った。調査牧区の平均傾斜角は、 16.5° で、最大 24.7° 、最小 9.3° で、微地形を頂部緩斜面、谷壁斜面、および谷底に分けた。メッシュ平均ごとの関係を土壌全重量と実容積についてみると、微地形ごとに大きな差はなく、地形構成物質の骨格は類似する。傾斜角 θ と固相率 S_v の間には、頂部緩斜面では S_v が小さく θ の増加とともに徐々に増加する傾向を示すが、谷壁斜面ではほぼ一定である。傾斜角 θ と仮比重 d の間には、頂部緩斜面では θ とともに増加するが、谷壁斜面・谷底では 0.7 g/cm^3 程度を示し変動は小さい。頂部緩斜面のなかでより緩傾斜な部分には、土壌骨格の火山噴出物に加えて牧草根系および腐植にとむことを示す。浸透能 I_b は、頂部緩斜面と谷底では傾斜角 θ とともに減少するが、谷壁斜面では変動は小さくほぼ一定である。頂部緩斜面では、 I_b の範囲は67～340 mm/hであるのに対し、谷底では50～202 mm/hと小さい。牧区下端での降雨流出測定では、強度3～4 mm/5 minの降雨により地表流出の発生が観測された。この地表流出は浸透能の地形特性から、谷底の低い浸透能域で発現することが推定された。

キーワード：放牧草地、傾斜角、固相率、仮比重、浸透能、地表流出

9. 北東シリア・ハブール川沿いの段丘と堆積物（第1報）

小口 高（東京大）・堀 和明（産総研・学振科技特研究員）・

小口千明（国際農研・学振科技特研究員）・西秋良宏（東京大）

Takashi OGUCHI, Kazuaki HORI, Chiaki T. OGUCHI and Yoshihiro NISHIAKI: River terraces and fluvial deposits along the Khabur River, Northeast Syria

ユーフラテス川の支流であるハブール川沿いに位置するセクル・アル・アヘイマル遺跡は、北東シリア最古の完新世古代村落と考えられている。この遺跡の周辺に分布する河成面と堆積物を調査した。河成面は現河床と約20 mの比高を持つH面、比高約9 mのM面、比高約5 mのL面、および現河道沿いの氾濫源に区分される。M面とL面は層理が不明瞭なフラッド・ロームと円礫で構成される。円礫は現河床にも多数分布し、最大粒径は約20 cmである。この円礫は、粒径数cmの小礫の周囲にカルサイトを中心とする塩類が同心円上に付着して形成されており、河川で運ばれた通常の円礫とは異なる。塩類の付着は礫層中での土壌水の移動によって生じた可能性が高く、その後の侵食時に円礫のみが残されて河床に集積したと考えられ